

序論)

①前回の振り返り

前回から通称、イザヤの黙示録といわれる。神様がイザヤに示した世の終わりの出来事についての預言を取り扱っています。前回の 24 章では主に世界に対する裁きが強調されており、その時、宗教的な格差、社会的な身分の格差、経済的な格差も取り除かれて、すべての人が等しく【主】に裁かれる立場になることが書かれていました。【主】がさばきの御業をなさるとき、身分の高い者も低くされ、世の人たち特に自分の力を誇り、自分たちの力で喜び楽しもうとしていた人たちの喜びは取り去られ、神様を裏切っていた人たちが裁かれて、【主】の栄光が現されるということが 24 章で語られていた出来事でした。

対して、今日の箇所はイザヤの賛美からはじまって、裁きの中にある神様の恵みと、全世界の人たちに対する神様からの宴会への招きが語られています。

1) 信じるに足りる不思議なご計画

まずは 1 節を読んでみましょう。

25:1 【主】よ、あなたは私の神。私はあなたをあがめ、御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、真実に成し遂げられました。

世の終わりにおける神様の裁きを見させられたイザヤは、同時にその裁きの中にも【主】の恵みや【主】の祝福があることを悟らされたようです。裁きという恐ろしい出来事の中に、神様の恵みと祝福があるというのは、人間には実現することができない神様の不思議なご計画であり、この神様のご計画は「まことに、真実に成し遂げられました。」とイザヤは宣言しています。

「まことに、真実に」と訳されている 2 つのヘブル語は、元々は「アーメン」という言葉から派生した言葉が使われています。「アーメン」という言葉の中のは、「その通りです」とか、「真実です」とか、「信頼に価するものです」という意味が含まれています。神様の世の終わりのご計画は、世を裁きつつも、恵みと祝福を与えるこの不思議なご計画で、その通りに必ず実現するものであり、真実であり、信頼に価するものなのです。

聖書を信じない人たちは、私達が世の終わりの出来事を語ろうとする時、「そんな

ことある分けがない」「イエスが死んでからもう2000年以上たっているのに世の終わりなんて来ていないじゃないか」「どうしてお前達はそんな夢物語を信じるんだ！」とそのように言いますが、聖書に書かれている神様のご計画。世の終わりに世界が裁かれ、同時に恵みと祝福がなされるというこのご計画は、まわりの人達が馬鹿にしたとしても、必ず実現する真実であり、信頼に価するものなのです。

## 1 ‘) 世の終わりの出来事

では、どのようなことが世の終わりにおきるのでしょうか。2節、3節は24章で強調されたことの繰り返しとなります。

**25:2** あなたは町を石くれの山とし、城壁のある都を廃墟にされたので、他国人の宮殿は町から失せ、もう永久に建てられることはありません。

**25:3** それゆえ、力強い民もあなたをほめたたえ、横暴な国々の都もあなたを恐れま

す。

つまり、世が裁かれて、人がそれまで積み重ねてきた人間的な栄光はすべて完全に壊されてしまっ、永久に再建することができなくなるのです。そして、そのような【主】のさばきがなされていた時、それまで「自分たちは強いのだ」といって横暴な振る舞いをしていた人たちも打ち砕かれて、その裁きをした神様をほめたたえるしかなくなるし、【主】を無視して歩んでいた人たちが、【主】を恐れられないわけにはいけない状態になるのです。

つまりですね。世の終わりの出来事というのは、今は、多くの人信じていませんが、【主】がその裁きの御業をなされたときには、どんなに世の人たちが【主】のことを否定したとしても、もう否定することはできない。ほめたたえるしかない。恐れるしか無い そのような状況になるのです。

だから、神様がこのような計画を持っているということを、私達は隠さなくてもよいし、恥ずかしがる必要もないのです。どんなに世の人たちが否定したとしても、否定できないほどの事実として、神様は必ずこの御業をなされるからです。

だから、みなさん。「聖書の中にハルマゲドンとか、最後の審判とかが書かれているけど。あなたはそれを信じているの？」と聞かれたならば、「もちろん信じています」って自信満々にいってください。これは否定できない事実なのです。

## 2) 裁きの中の恵みと祝福

### ① 砦、避け所、壁

さて、問題はこの神様のさばきの出来事の中に恵みと祝福があるということです。まずは、4節、5節を読みましょう。

**25:4** あなたは弱っている者の砦、貧しい者の、苦しみのときの砦、嵐のときの避け所、暑さを避ける陰とられました。

横暴な者たちの息は、壁に吹きつける嵐のようです。

**25:5** 砂漠の日照りのように、あなたは他国人の騒ぎを抑えられます。暑さが濃い雲の陰で鎮まるように、横暴な者たちの歌は鎮められます。

聖書に書かれている世の終わりの出来事をみると、嵐があったり、地震があったり、戦争があったり、色々な大変な出来事があるのですが、神様はそのような中でも、弱っている者、貧しい者、苦しみの中にいる者の砦となり、避け所となり、壁となってくださいます。

世の終わりのとき、神様に従わない人たちは、ますます横暴に振る舞うようになり、神の民にとってはまるで嵐が襲ってきたかのような状態になります。でも、その時、【主】は砦となり、避け所となり、壁となって守ってくださるのです。

だから、世の終わりのとき、私達は恐れなくて良い。厳しくて苦しい状況にあるとき、私達は恐れず、【主】が私達を守ってくださることを信じて待っていればいいのです。

まあ、世の終わりの出来事の順番については色々な説があります。いわゆる患難期と呼ばれる「苦しみの出来事の前に、神の民は天にあげられる」という説であったり、いやいや、「世の終わりの患難の一部の神の民は経験してそれから天にあげられる」という説であったり、地上で患難を経験したあとに天にあげられるという説であったり、いくつか、世の終わりについての説があるのですが、神様は、例え私達が弱ったり、貧しくなったり、苦しくなったりすることがあったとしても、私達の砦となり、避け所となってくださるといふ恵みを必ず与えてくださるのです。

だから、私達は世の終わりのことを恐れなくて良いのです。

## ②【主】の宴会への招き

いや、恐れなくてよければいいか、私達は世の終わりのときに神様に期待を持つことができるのです。それはどのような期待を持つことができるかということ、神様が世の終わりの時に、私達を神様主催の宴会に招いてくださる。神様のパーティーに招いてくださる。という期待を持つことができるのです。そのことが書かれている

のが6節から9節の部分です。1節ずつ読んでいきましょう。

**25:6** 万軍の【主】は、この山の上で万民のために、脂の多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、髓の多い脂身とよくこされたぶどう酒の宴会を開かれる。

つまり、豪華なごちそうが備えられた宴会を神様が開いてくださるということです。ここでいう脂身の多い肉とか、良いぶどう酒といったごちそうは、実際にそういった食べ物や飲み物が提供されるというよりは、人間の世界ではこのごちそうのような祝福を、神様はご自身が主催された宴会で私達に与えてくださる。ということでしょう。

注目していただきたいのは、この宴会はイスラエル人とか、ユダヤ人だけのために開かれるのではなくて、万民のため。つまり、神様からこの宴会に招かれたすべての民たちのために、神様はこの祝福の宴会を、祝福のパーティーを開いてくださるのです。

このパーティーではどんな祝福があるのでしょうか？

1つ目の祝福は、覆いを取り除かれるという祝福です。7節を読みましょう。

**25:7** この山の上で、万民の上をおおうベールを、万国の上にかぶさる覆いを取り除き、

山の上の出来事を切っ掛けに覆いをかぶらなければいけなくなった人といって、みなさんは思い出す人がいるでしょうか？ そうモーセです。彼は山の上で神様から律法をいただくときに、神様と直接向き合うことによって顔が輝くようになりました。でも、その顔の輝きはあまりにも【主】の栄光を現すものだから、イスラエルの民たちはモーセを直視できなくなったので、彼は民たちと会う時には顔に覆いをかけなければいけなくなりました。でも、神様と向き合うときは覆いはいらなかったのです。ある意味で覆いをとりのけられるということは、このモーセと同じ状態になるということです。

また、新約聖書においてパウロはこのように言っています。

**第二コリント 3:18**

私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光か

ら栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

つまり、どうゆうことかという、罪をもっている私達は神様の栄光と直接向き合うことができないのですが、イエス様を信じることによってその覆いが取り除かれて、【主】の栄光を受けて、自分も【主】と同じように変えられていくということです。

それが今の私達の状態です。私達はまた、完全に【主】と同じにはなれていない。救われているけども、まだ罪という汚い影を持っていたりします。でも、少しずつ変えられていって、世の終わりに【主】が祝福の宴会を開いてくださるときには、私達はもはや完全に罪が拭い去られた存在になるので、覆いとか、ベールのはいらなくなるのです。モーセが【主】と向き合って輝いたように、私達も完全に【主】の栄光を100%受け取って輝くことができるようになるのです。みなさん、これが【主】の宴会で与えられる1つ目のごちそうです。

そして2つ目のごちそうはなにかかというと。「死が永久に呑み込まれる」ということです。8節を読みましょう。

**25:8 永久に死を呑み込まれる。【神】である主は、すべての顔から涙をぬぐい取り、全地の上からご自分の民の恥辱を取り除かれる。【主】がそう語られたのだ。**

「永久に死が呑み込まれる」というのは、肉体的に死ななくなったとか、霊的に死ななくなったということではなくって、神様との関係が永遠に続くようになったということです。聖書における死というのは、神様との関係が切り離されることであって、いのちというのは神様との関係が繋がっていることです。私達は罪によって神様との関係が切り離されてしまいました。つまり、死んだのです。でも、その私達と神様との関係を切り離す死が呑み込まれるということは、私達と神様との関係を邪魔するものが一切取り除かれるということです。私達は世の終わりの時、100%【主】の栄光を受けることができるだけじゃなくって、100%神様との愛の関係をもち続けることができるようにされたのです。

そして、その結果として、3番目、4番目のごちそう。「すべての顔から涙をぬぐい取られ」「恥辱を取り除かれる」わけです。涙というと、嬉し涙というものもあり

ますが、涙は悲しみの象徴ですよね。私達の悲しみの根本的な理由は、私達と神様との関係が、切れていたり、崩れていたり、歪んでいたりするからです。でも、神様との関係は一切切り離されないものになるので、当然、私達の悲しみは全部とられて、涙は拭い去られます。みなさんが今悲しいと思うようなことも悲しまなくて良くなるのです。

そして、死がなくなって、罪がなくなりますから、当然、私達は恥というものも持たなくてよくなります。恥というのは罪の副産物です。アダムとエバが罪を犯して最初にもつようになったのが恥の心です。それは罪をもつことによって自分が神様の前で恥ずかしい存在だとおもうようになったからです。

私自身も自分のことが好きではなかったのですが、私達が自分に自信がなかったり、劣等感が強かったり、堂々とできない根本的な理由は、自分の中の罪、恥というのを意識するからです。でも、神様は世の終わりには私達を完璧にきよめられて、一切の罪のない、死のない、恥の無い存在にしてくださるので、その時、私達はもはや自分のことを嫌わなくて良くなるのです。自信がなくてオドオドしたり、キョロキョロしたりする必要がなくなるのです。胸をはって神様の前にたてるのです。言い換えるのならば、神様との関係が完璧になるので、自分の中の恥がなくなり、自分を完全に愛する事ができる存在に私達はされるのです。

みなさん、これが世の終わりのときに、【主】の宴会において与えられるごちそうは、このように100%神様の栄光を受け、100%神様と密接につながり、100%悲しみがなく、100%自分を愛せる存在になれる。そういった救いなのです。だから、私達は世の終わりのときに9節のようにいうことができるのです。読みましょう。

**25:9** その日、人は言う。「見よ。この方こそ、待ち望んでいた私たちの神。私達を救ってくださる。この方こそ、私たちが待ち望んでいた【主】。その御救いを楽しみ喜ぼう。」

だから、私達にとって世の終わりの出来事というのは、待ち望むべき祝福の日であり、とってもしみない喜びあふれる救いの完成の日なのです。

神様は、世の終わりのときに、このような祝福を与えてくださる。

だから、私達は、【主】の日、その日を心から期待すべきなのです。

3) 人の高ぶりと要塞はくだかれる。

このように神様のさばきと祝福はコインの表と裏のような関係なんですが、10節から12節ではまた、このさばきの部分が語られています。

**25:10 【主】**の手がこの山にとどまるとき、モアブはそこで踏みつけられる。藁が汚水の中で踏みつけられるように。

**25:11** 泳ぐ人が泳ごうとして手を伸ばすように、モアブはその中で手を伸ばす。しかし主は、その手の巧みさも、その高ぶりも低くされる。

**25:12** おまえの要塞、そそり立つ城壁を主は引き倒して、低くし、地に投げつけて、ちりにまでされる。

モアブというのは、イザヤ書の中には高ぶった人の代表例としてよく取り上げられます。だから、ここではモアブのこと名指しで書かれていますが、モアブだけを【主】がさばくのではなく、モアブのように高ぶる人に対する裁きの代表例として、ここでモアブのことが語られているのと理解するのがよいでしょう。

ここで【主】はモアブと踏みつけるといわれています。要は徹底的に叩きのめすということです。11節の「泳ぐ人が泳ごうとして手を伸ばすように」というのは、世の終わりに【主】のさばきがおこなわれていてもなお、なんとか自分の力でこの荒波を泳ぎ切ってやろうとあがいている人の姿です。世界は、神様の裁きを経験すると、【主】を恐れ、【主】をほめたたえるようになるんですけども、そのように【主】の臨在が明確にしめされてもなお、自分の力で泳ぎきろうともがく人たちがいて、その人たちは神様の栄光を認めようとしない高ぶった人たちなので、【主】は、さばきの手を伸ばして、神様なしで、自分たちだけでなんとかしようとする、その高ぶった思いを打ち壊して、低くされるという事が示されています。

その時、彼らが頼りにしていた、自分たちで造った要塞や城壁も、粉々に打ち砕かれるからです。

みなさん、ここに【主】に希望を置く者と、自分の力に頼る者の違いが明確にされています。【主】に希望をおけば、【主】ご自身が砦となり、避け所となり、壁となってくださる。でも、【主】ではなく自分の力に頼る時、自分の力で世の終わりの時代を泳ぎきろうとするときに、【主】はその力を打ち砕かれて、徹底的に低くされるのです。

まとめ)

さて、みなさん。前回も聞きましたが、みなさんにとって世の終わりとはどのような時でしょうか。困難と裁きが溢れる苦しい時でしょうか。それとも、究極的な【主】の救い。神様の主催の宴会を体験する祝福のときでしょうか。

【主】は世の終わりのときに、さばきだけではなくって、救われた私達を【主】の宴会に招いてくださり、祝福というごちそうを与えてくださいます。

今はまだ、私達は不完全なものなので、悲しみの涙をながしたり、自分のことを恥じて、落ち込んだり、自分に自信がなくなったりするときがありますが、その日には私達は100%【主】の栄光をうけとり、100%神様との関係が結びつき、100%自分のことも愛せるようにされるのです。

【主】によって救われた人にはこの希望が与えられています。

みなさん、是非その日がくることを期待して、喜んで待ち望みましょう。

この預言はアーメンな預言です。御言葉の通り、必ず実現する預言です。是非、疑うことなく、信じて待ち望んでいきましょう。